



Title	The Influence of Social Comparison on Economic Performance
Author(s)	山根, 承子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34021
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (山 根 承 子)

論文題名

The Influence of Social Comparison on Economic Performance
(社会的比較が経済パフォーマンスに与える影響)

論文内容の要旨

Comparisons are a common feature of everyday life. Only through comparison can we ascertain our own relative performance. The targets of comparison are sometimes called “reference points.” This doctoral dissertation is a study of external reference points, which includes other people such as family, neighbors, and colleagues. It aims to identify the influence on economic performance of relative information gleaned from social comparisons. It seems natural that people would be significantly influenced by their awareness of others. But can we measure this effect? Does self-comparison with others improve one’s own performance? Are there systematic differences among people in their sensitivity to these influences of self-comparison with others? This dissertation empirically investigates these questions.

In chapter 1, I show that people are indeed influenced by self-comparison with others through an examination of “peer effects” in competitive swimming. I find that swimmers are aware of which among their peers have worse personal-best records than themselves. Being chased improves swimmers’ performances. In chapter 2, I construct a new model of goal setting. Goals can be considered one of the targets of comparison, and findings about goal-setting behavior apply to comparison behaviors with other reference points. My model includes four features: the endogeneity of the goal, the influence of the goal on performance, heterogeneity in sensitivity to external inducements, and heterogeneity in the reaction to a high goal. I demonstrate the validity of this model through a laboratory experiment. Based on chapters 1 and 2, I find that relative information significantly influences individual economic performance. What are the wider social implications of this? Disparity in social status is a macro-level problem that can result from variation in economic performance caused by social comparisons. In chapter 3, I suggest that disparity should be measured by subjective happiness. I find that the income disparity widened from 2003 to 2006, while the happiness disparity remained constant over this period.

The research for this dissertation shows that there is a significant influence of comparison on economic performance. There is an influence of relative information on material and mental performance as well as nonlinearity and heterogeneity in the size and direction of the influence.

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (山 根 承 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	筒井義郎
	副 査	教授	池田新介
	副 査	教授	大竹文雄

論文審査の結果の要旨

〔論文内容の要旨〕

人間は、日常生活の様々な場面で比較を行っている。比較することで、人間は自身のパフォーマンスの相対的な位置を知ることができる。人間が他者から影響を受けていると考えるのは自然なことであろう。しかし、それをどのように測定できるだろうか？ 比較することで、パフォーマンスは上昇するのだろうか？ また、他者から受ける影響の大きさに個人差はあるだろうか？ 本論文はこれらの問いに答えることを目的としている。

第1章では、人が他者から受ける影響の大きさとその方向について、競泳データを用いて実証している。ウェブから入手した大規模な競泳データを用いて、「他者のパフォーマンスが高い時、自身のパフォーマンスは上昇するのか」「他者が存在するかどうかで、自身のパフォーマンスは変化するのか」の2点が分析されている。その結果、自分よりも低いベストタイムを持つ人がパフォーマンスを上げると、自身のパフォーマンスが上昇することが明らかにしている。また、自分よりも遅い他者の存在がパフォーマンスを上昇させることを明らかにしている。つまり、自分よりもパフォーマンスの高い人を追う時ではなく、自分よりもパフォーマンスの低い人に追われることによってパフォーマンスが向上する。

第2章では、目標をリファレンスポイント（参照点）として捉え、目標設定に関する新しいモデルを構築している。このモデルは心理学の目標設定理論の知見を取り入れており、「目標が内生性に決定される」「目標はパフォーマンスに影響する」「外生的な影響の受けやすさには個人差がある」「高い目標が与えられたときの反応には個人差がある」という4つの仮定を置いている。これらの仮定を組み入れることによって、本モデルは従来のモデルよりも現実を詳細に記述できるものとなっている。第2章では、計算問題を目標なしで解く条件、目標を自分で設定してから解く条件、外生的に与えられた目標の下で解く条件の3条件の実験室実験を行い、このモデルがおおむね妥当であることを実証している。つまり、人は目標を内生的に決定しており、目標の高さはパフォーマンスと関連する。さらに、高い目標が与えられた時の反応や、目標からの影響の受けやすさには個人差が観察される。

第1章と第2章の結果が、相対的な情報が個人の経済パフォーマンスに有意な影響を与えることを明らかにしているのに対し、第3章は、社会的比較をマクロレベルで議論している。社会的比較が経済パフォーマンスに与える影響をマクロレベルで考えることは、格差の問題を考えることに他ならない。本章の特徴は、従来、所得で測定されてきた格差を、主観的幸福感の格差で分析することである。具体的には、大阪大学のCOEのアンケート調査の結果を用いて、各都道府県の主観的幸福感の水準を比較している。分析の結果、主観的幸福感の格差は所得の格差より小さく、個人特性を調整するとほとんど格差が見られないと報告されている。また、所得格差は2003年から2006年の間で広がっているが、幸福度の格差は広がっていないことを明らかにしている。

〔審査結果の要旨〕

本論文は、自分よりもパフォーマンスの低い人を強く意識することや、影響の受けやすさや向きは個人によって異なることを示している点、また、比較が直接利得に影響しない場合でもパフォーマンスに影響を与えることを示している点で興味深い。よって、本論文は博士（経済学）としての価値があるものと判断する。